



村田省蔵作 斑雪 2008 -村田省蔵展より-

当館企画展

## 村田省蔵展 -画業60年の歩み-

■新春を寿ぐ -天神画像を中心に-

■雅の造形 -茶道と能楽-

■-清廉の女性美- 竹沢基展

■明治の工芸

# 一画業60年の歩み

平成25年1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休



村田省蔵氏近影

## 学芸員の眼

村田省蔵氏の描く空は時に青くはなく、思いもよらぬ色が用いられています。普通、空は薄い青の空色や青、さらには紺碧をイメージしますが、それは晴天時のことで、冬の日本海側では重く雲に覆われ灰色がむしろ日常で、反対に太平洋側はからりと見事なスカイブルーとなり、羨ましくもありません。季節や地域、時間帯によって現実の空の色は様々です。しかし、黄や黄土、緑となると、これは村田氏の創作というべきで、実際にすることはないのであるが、作品として違和感なく見ることができているのが不思議です。「絵は現実を咀嚼し、再構成して、一定の平面上に描いたものである」と、村田氏の多岐に渡る空の色は語っているようです。

村田省蔵氏は昭和四年(一九二九)金沢市に生まれ、金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)の第一期生として油彩画を学び、高光一也、宮本三郎の薫陶を受けました。在学中より日展、光風会に入選し、卒業後、洋画家として立つことを決意して上京、小糸源太郎に師事し、風景画を主体に制作に励みます。日展を発表の場とし、平成二年日展評議員、十八年日本芸術院会員に推挙されました。

村田省蔵氏は昭和四年(一九二九)金沢市に生まれ、金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)の第一期生として油彩画を学び、高光一也、宮本三郎の薫陶を受けました。在学中より日展、光風会に入選し、卒業後、洋画家として立つことを決意して上京、小糸源太郎に師事し、風景画を主体に制作に励みます。日展を発表の場とし、平成二年日展評議員、十八年日本芸術院会員に推挙されました。



春耕 2005 第37回日展 恩賜賞・日本芸術院賞

## 新年のあいさつ

館長 嶋崎 丞

あけましておめでとうございます。本年も皆さん方のご支援ご協力をえて美術館の運営に当たって参りたいと思っておりますのでよろしくお願ひ申し上げます。

年度でいいますとまだ平成二十四年度で一月四日からは、本年度最後の企画展「村田省蔵展」を開催します。ご存知の方も多いただろうと思ひますが、村田さんは金沢市ご出身の洋画家で、風景画の分野では日本を代表する作家の一人で、その業績により、平成十八年には日本芸術院会員に就任されました。本展は画業六〇年を回顧する大展観で、お正月を飾るにふさわしく、充分ご堪能いただけるものと思ひています。

四月からの平成二十五年度は、当館の新館が設立されてから三十周年の年に当たります。従って三十周年を記念するにふさわしい大型の企画展を開催すべくその準備をすすめています。その内容については年が明けてから発表させて頂こうと思ひていますので、期待を込めて今暫くお待ち下さいますように。企画展開催もさることな

# 新春を寿ぐ —天神画像を中心に—

1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

# 村田省蔵展

主催／石川県立美術館  
共催／北國新聞社 後援／(財)石川県美術文化協会

前田育徳会尊經閣文庫分館では、「新春を寿ぐ」と題した展示を行います。新たな年の始まりにあたり、天神画像のほか、茶道具、文房具などをご覧いただけます。前田家では、早くより天神信仰を行っていたと思われ、三代藩主利常の時代、幕府あてに家格や家系を提出した「寛永諸家系図伝」で、菅原道真を祖とする主張しています。また、京都・北野天満宮を崇敬していた利常は、明暦三年（一六五七）小松に北野天満宮の四分の一の規格の小松天満宮を建立しました。この時、後水尾上皇から宸筆の色紙が認められる天神画像が贈られ、以後前田家の至宝として崇拝されてきました。その後の歴代の藩主は、今回展示する「胞輪天神画像」をはじめ、積極的に天神関係資料の収集を行うとともに、領内においても天神信仰の振興を図ることになりました。

加賀藩の茶道は、藩祖利家の時代に始まり、以降、歴代藩主へその嗜好は受け継がれ、茶道具も多く揃えられました。金沢は、東京、京都と並んで、お国もの（その土地で出来たもの）だけで茶会を開くことが出来ると言われますが、これも藩政時代から育んできた文化的土壌の賜物と言えるでしょう。本特集では、前田家の家紋である梅を配した「玳皮盞天目茶碗（梅花天目）」、孫六の銘を持つ「古瀬戸茶入」などを展示します。

これらの作品を通して、新たな年の始まりを感じていただければ幸いです。

繩敷天神画像

◆料金表（二階コレクションン展料金を含みます）

	一般	大学生	高中中生
個人	八〇〇円	六〇〇円	二〇〇円
団体	六〇〇円	四〇〇円	一〇〇円

\*団体は二〇名以上、当館友の会会員は団体料金となります。

◆関連行事

◇ミュージアムコンサート

会場：美術館ホール

1月12日（土） 午後1時30分

「しゅうえい」日本の風景を歌う

◇講演会 対談形式 会場：美術館ホール

1月13日（日） 午後1時30分

「これからの道」

講師・村田省蔵氏

聞き手・嶋崎丞（当館館長）

聴講無料・申込不要

◇ギャラリートーク 会場：企画展示室

会期中の日曜日1月6日、1月20日、1月27日、2月3日、2月10日、午前11時より担当学芸員が行います。なお、1月13日は行いません。

観覧料が必ず要となります。

観覧料が必ず要となります。



明けの雪 1996  
式年遷宮記念神宮美術館

がら、地域の皆さん方から、以前にも増して美術館からの情報発信と、活発な教育活動の展開が求められるようになってきました。このことは当然なこととで実施することが美術館の活性化にもつながっていくことはいままでもありません。

そして平成二十六年末から二十七年の初めにかけては、北陸新幹線がいよいよ開業ということになり、このことについても関連した美術館の事業を色々考えていかねばなりません。皆さん方から美術館に対する活発なご意見をお寄せ下さいますよう心からお待ちしています。



## 第3展示室

# —清廉の女性美— 竹沢基展

1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

竹沢基氏は大正四年小松市安宅町生まれ。教員である父の転任に伴い、金沢、羽咋と移り、昭和八年に県立羽咋中学を卒業、十年に東京美術学校油画科に入学。志賀町出身の南政善は中学と美術学校の先輩にあたります。学校では藤島武二に師事しました。当時藤島は旭日を描くために各地を取材していた時で、最晩年の弟子といえます。細部にこだわらず大きくものを見ることを徹底して教えられ、竹沢氏の金沢美大における教授法は藤島譲りであったと聞きます。細かく付け足すのではなく、ある塊から削り落としていく、これがモットーでした。

金沢美大には二十三年から助教として勤め、学生に描かせる石膏像を求めて上野へ買い出しに出かけ、抱いて夜行列車で帰るなど、草創期の苦心は多かったようです。五十六年の定年退官まで三十三年

の長きにわたって学生を指導・育成し、清廉な人格と真摯な創作は多大な影響を与え続けました。作品は着衣の女性が主体で、光風会展と日展に出品された女性像は、いずれも伸びのある力強い線と、色数を限定した明快な色調で描かれています。細かで柔らかい描写はなく、一見素っ気ないようですが、じっと見ていると、空間の中に女性が確かに息づいていると感じます。「白木の美しさ」、竹沢氏の女性像にはこの言葉がふさわしく思えるのです。特集では所蔵の優品を一堂に展示します。どうぞ、ご覧ください。



竹沢基 ショールをまとう

## 第2展示室

# 雅の造形 —茶道と能楽—

1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

新しい年を迎えました。古来より、元日には特別な意味がありました。それは、新たに一から始まるという神聖な日であり、特別な日と考えられています。しかし今日では高度情報化社会のなかで日々の時間に追われていて、新年を迎えるという「節目」の感覚が非常に希薄になってきているのではないのでしょうか。このような「節目」は、日本の生活文化のなかで、重要な意味を持っていました。「茶道」と「能楽」は中世の芸道思想の中から生まれたもので、これは和歌や仏道の精神がその成立に大きく関与しています。村田珠光の「月も雲間なきはいやにて候」(『禪鳳雑談』金春禪鳳)に象徴されるように、「不完全の美」という目に見えぬものを心の眼で補完する美意識が、茶道における「わび」であり、能における「幽玄」という精神世界に昇華され

ています。現代は物質の豊かさよりも、心の豊かさが求められる時代へと大きな転換点を迎えています。新たな年のはじめに加賀藩ゆかりの作品を中心とした雅の造形に、日本の歴史や文化を再考していただく機会となれば幸いです。

### 主な展示作品

〈茶道〉 ◎色絵梅花図平水指 野々村仁清

○古今集巻第十八断簡(本阿弥切)

□和蘭陀白雁香合 デルフト窯

△葫蘆様釜 初代宮崎寒雄

〈能楽〉 翁 伝三光坊 孫次郎 是閑

色変鶴菱文唐織

桃色地山道文摺箔

◎重要文化財 ○重要美術品 □県指定文化財  
△市指定文化財



桃色地山道文摺箔



□和蘭陀白雁香合

# 今月の見どころ

## 第4・第6展示室

1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

**第4展示室 彫刻**

新春からの展示は、本県出身または本県に關係深い彫刻家の内、人体彫刻で活躍する作家の作品を中心に展示します。代表的作品を紹介すると、「和」は金沢市生まれの畠村直久の代表作の一つで、三人の女性群像です。ふくよかな量感が淀みない繋がりを示しています。幼少期から高校までを金沢で過ごした松田尚之作「人魚」は、強調と省略を行いシンプルで力強いフォルムの作品です。人魚というファンタジーのイメージを越え生み出した命感豊かな作品となっています。



松田尚之 人魚

**第6展示室 日本画**

第6展示室の近現代日本画は、新しい年を飾るに相応しい作品をご覧いただけます。展示室に入りますと、巨匠二人の屏風が目につくことでしょう。金地に墨で雄大な中国風景を描いたのは、横山大観筆「長江の朝」。橋本関雪筆「八仙人図」は、その筆法と構想に舌を巻きまします。いずれも中国に対する近代日本画家の憧憬が生み出した優品です。



橋本関雪 八仙人図(部分)

**第6展示室 版画・書**

版画・書部門では、「新年のはじまり」をテーマに作品を展示します。今回が初展示となる棟方志功の「東西南北頌の柵」は、日本の最初の者たる神々やマトタケル、コノハナサクヤ、スサノオ、アミノウズメが手をあげ足をあげ踊りを躍る姿を表したものです。祝い踊るかのような神々の力強い姿をお楽しみください。



棟方志功 東西南北頌の柵

# 超絶技術！

## 明治の工芸

1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

日本に伝わった技術で伝統的な図柄を施した、欧米の家屋で使うことを目的とした器物や室内装飾品。これが明治時代に欧米への輸出を目的として作られた、工芸作品の特徴です。これらの作品はジャンルを問わず、全体的に大きいもの、隙間を埋め尽くすように豪華な装飾が施されたものが多く見られます。いったいどういう経緯で、このような作品が作られたのでしょうか。

江戸時代まで受け継がれてきた伝統的な美術工芸は、武家社会の崩壊とともに、製作する職人たちも減少しましたが、欧米諸国への対応として明治政府が殖産興業の政策を執り、輸出品として美術工芸品を製作することが奨励されました。内国博覧会、万国博覧会に出品され、高い評価を受けた作品を見本とする輸出用の作品は、必然的に具体的で分かりや

すい日本的モチーフの、欧米規格となったのです。装飾に用いられた伝統的な技術は、当代一流の作家たちによるものです。今回の出品作品の一つ、銅器会社の「金銀象嵌花鳥人物文薄端」は、地の金属に色の違う別の金属を嵌め込んで、図柄を表す「象嵌」という技法で、十二単の女性を、着物の柄模様まですべて表現しています。現在この精密な技術を、完全に復元することは困難でしょう。

近年、資料の発見などから研究が進み、注目を集めつつある明治の工芸美術。技術の粋を結集した作品を、ぜひご堪能ください。



金銀象嵌花鳥人物文薄端 銅器会社

# この秋開催した特別陳列

平成24年10月25日～11月28日

## 前田育徳会尊經閣文庫分館

### 加賀藩の美術工芸

加賀藩は三代から五代藩主の時代に、名品の収集とあわせて美術工芸の制作者、享受者とともに育成する総合的な文化政策を推進しました。近年の「加賀藩の美術工芸」と題した特別陳列はそのハイライトとして、収集された名品と美術工芸育成事業を象徴する重文「百工比照」の一部を紹介してきました。今回は、絵画では黙庵靈淵筆「四睡図」、伝周文筆「四季山水図」、伝雪舟筆「四季花鳥図」（以上重文）に狩野探幽筆「達磨渡江図」を展示し、江戸時代初期の大名文化が室町時代の北山文化や東山文化への憧憬を基に展開したことを跡づけてみました。そして会期が「日本伝統工芸展金沢展」とも重なったことから、「百工比照」から「金色類」、「木之類」のすべてと釘隠引手、釘隠金具の造形的に人気が高いものを選んで展示し、県内外の方々から工芸王国石川の奥深さを改めて知ることができたと好評をいただきました。



## 第4展示室

### 能登の彫刻家たち

本展は能登出身や、同地区で現在、制作活動中の彫刻家に焦点を絞った展示でした。各作家の最新作をはじめ代表作を出品いただき、たいへん彩り豊かな展示となりました。各位に感謝申し上げます。展示作品は各作品の制作テーマ・表現そして彫刻素材がそれぞれ異なりをみせ、各作家の個性が反映したもので、それらは能登の風土に似て素朴ながらも観る者に確かな存在感を伝えたものであったと感じています。また屋外設置も可能な彫刻の特性から、各作家の屋外を中心に「特に能登地区に」設置・展示されている作品についても写真で紹介することが出来、観覧の皆様においても、見覚えのある作品もあつたのではないかと思います。展示を契機に作品・作家と地域が身近に感じられたのではないかと思います。なお作品タイトルに係って「月」や「星」が多く目に付きました。本展出品の現役作家十三人、計二十一点中、七点までもがそうであり、能登の彫刻家にはロマンチストが多くいるのかなと微笑ませてくれると共に、今日的に環境・自然への関心の表れもあつたかと感じています。



## 第5展示室

生誕一〇〇年記念

### 寺井直次の漆の美

本展は、大正元年金沢市に生まれ漆の道を極めて、蒔絵の重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された寺井直次氏の、生誕一〇〇年を記念して開催いたしました。初期から晩年に至る漆芸作品七〇点に、スケッチや下絵を加えて、寺井氏の創作活動の軌跡を回顧しようとするものでした。会場は、「昭和前期」さまざまな技法の習得、「昭和中期」卵殻技法の展開、「昭和後代」昭和中期「卵殻技法の展開」「昭和後期」平成「金胎蒔絵の確立」「多様な美の創造」「小さな美の世界」「スケッチ・下絵」と、それぞれテーマを設けて構成しました。やや煩雑でわかりにくい部分もあつたのではないかと思います。できるだけ解説などを置いて作品鑑賞の手助けとなるよう努めました。会期中は、天候不順のなか、多くの方にご来館いただき、まことにありがとうございます。また、本展開催にあたり多大なご協力を賜りましたご遺族並びに関係各位に対し、あらためて厚くお礼申し上げます。





# どこでもミュージアム／キッズプログラム

どこでもミュージアム（学校出前講座）

十一月の学校出前講座は、小松市立今江小学校、かほく市立金津小学校、羽咋市立邑知小学校で行われました。十一月にもなると天候が悪い日が多く、展示会場への作品の搬出入時の雨が気になります。幸い、どの日も不安定な天気ながら雨は何とかさけて開催することが出来ました。アートゲーム・対話型鑑賞・自由鑑賞と活動を変えながらの鑑賞を体験して頂き、この十一月に行われた三校で今年度予定していた出前講座はすべて終了いたしました。



キッズプログラム

十一月十一日（日）、特別陳列「寺井直次の漆の美」の小学生親子の鑑賞会「寺井直次のわざにせまる」が行われました。最近では家に漆器がなく、漆に馴染みのない子どもたちもいましたが、寺井直次さんの展示室での好きな形や模様見つけでは、一所懸命に注目していました。今回は寺井直次さんの作品で目を引く卵殻の技法にも挑戦してもらいました。卵を貼るのは細かい作業だけに、皆真剣です。貝の破片で螺鈿もちょっぴり体験でき、おしゃねになった手作りの黒い紙箱を大事そうに持ち帰る参加者の皆さんでした。



## 一月の行事予定

■土曜講座	午後1時30分	講義室	聴講無料
19日（土）	山川コレクションと金沢の文化	高嶋 清栄 学芸第二課長	
26日（土）	竹沢基と金沢の油絵	二本伸一郎 普及課長	
■ビデオ上映会	午後1時30分	美術館ホール	入場無料
6日（日）	日本の原風景を求めて 日本の巨匠6 生活を描く	日本藝術院会員 村田 省蔵 吉井 淳二	36分 13分
■キッズプログラム	午後1時30分	講義室	参加無料
20日（日）	竹沢基展鑑賞講座「木炭で絵をかくって??」		

## 友の会の皆様に新しい特典

友の会会員の皆様に、うれしい特典が追加されました。平成二十五年一月四日より、館内のカフェ「ルミューゼ ドアッシュ KANAZAWA」で友の会会員証を提示して頂きますと、ドリンク二〇〇円引の特典が受けられます（土日祝を除く）。会員の皆様には、展示会のご鑑賞はもちろん、カフェもご利用頂きやすくなりました。

## ミュージアムシヨップ通信

日展を代表する風景画家、村田省蔵氏（芸術院会員）の展示会がいよいよ開催です。学生時代から近作までを辿ることで、現在多くの人々を魅了してやまない色彩豊かな風景画は、確かな描写力に裏打ちされたものであることがわかります。本展に出品された九十四点は、いずれも氏の各時代を代表する作品です。それらを網羅した本展図録は、氏のバイオグラフィともいえるでしょう。手元に置いて、本展の感動を繰り返し味わいたい一冊の完成です。



定価二〇〇円



室町時代からの彫金の家柄として著名な後藤家は、加賀藩前田家の御用を受け、調度品や装剣小道具の製作を行い、また藩の御細工所で職人の指導にあたりました。

加賀象嵌は、後藤家の象嵌技法をさらに一歩進めた平象嵌です。文様の線や点、図柄のすべてを彫った表面より彫り下げた底の部分を広くし、その部分に他の金属を打ち込むと底の部分に広がって、打ち込んだ金属が抜けないという特殊な技法です。江戸時代前期頃、鐙にこの技術が用いられ、その華麗な意匠と堅牢さにより、加賀象嵌といえは象嵌鐙を指すほどまで全国に知れ渡りました。明治維新後、銅器会社でこの技術の復興が行われ、銅器に象嵌を施した海外輸出品が製作されましたが、その後衰退しました。

水野家は、日本金工界の統領であった後藤家の代理として、金沢において金工職人たちを率いてきた家柄です。作者の八代水野源六は金沢に生まれ、一八七七年(明治十)金沢に設立された銅器会社では職工棟取として活躍した名工です。

本作品は、雪持松に鷹図を写生風に金、銀、赤銅の象嵌に毛彫を加えて力強く表現し、裏面には対比的に一羽のかれんな小鳥を配しています。鷹をよく見ると、羽を休めているのではなく、飛び立とうとする寸前のようにあり、静から動への一瞬を捕らえた緊張感あふれる画面となっています。銀製の火屋(蓋)には雪の結晶をイメージした六角形の文様七種を、象嵌と透かし彫りで配しています。明治時代工芸の特徴の一つである絵画調の優品です。

(この作品は一月四日からの『明治の工芸』展にて展示しています。)

次回の展覧会 会期：2月15日(金)～3月23日(土)

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室	第3展示室
前田家の婚礼調度	蘇る赤羽刀	田辺栄次郎展 —南仏の光—

ご利用案内

コレクション展観覧料  
 一般 350円 (280円)  
 大学生 280円 (220円)  
 高校生以下 無料  
 ※( )は団体料金  
 毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(1月は7日)  
 1月の開館時間  
 午前9:30～午後6:00  
 カフェ営業時間  
 午前10:00～午後7:00

1月の休館日は  
 1日(火・祝)～3日(木)



明治10年8月、  
 加賀藩 前田家の出資により創業。

北陸銀行

金沢支店 / 〒920-8686  
 金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131

広告

石川県立美術館だより  
 第351号(毎月発行)  
 2013年1月1日発行  
 〒920-0963  
 金沢市出羽町2番1号  
 Tel:076(231)7580  
 Fax:076(224)9550  
 URL <http://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>